第３回 教育展（大学の授業 国文学科から国語領域専攻）

植山　俊宏
（国文学科・附属図書館長）

江戸時代にはすぐれた学塾があった。有名なもの、特に民間のものとして慶應義塾はもとより、咸宜園、適塾、順天堂などが知られる。それぞれの目的と機能は多種多様でとても説明が及ぶものではない。しかし、共通点がある。卒業生の人脈が大きく社会に貢献してきたことである。

子規山脈ということばがある。正岡子規に連なる人々のことである。子規連山と言い換えた方がよりイメージが豊かに湧いてくる。子規は弟子を採る気はなく、すべて同志として扱い、その才を伸ばすのがうまかった。というと短所に目をつぶり、長所を伸ばしたように思われるが、実は、子規は経験の長短、長幼を問わず遠慮会釈なく、優劣を論じ、拙を戒めたのである。公平とはこういうものだという範のようである。子規の遺品にはたくさんのさまざまな採点表がある。句会の評がもっとも有名である。この点、徹底した得点主義と昇進主義を採った適塾に似ているかもしれない。

このたび附属図書館主催、教育資料館共催で第三回教育展が企画された。第一回の教育学科を受けて、国文学科が担当することになった。だが、教育学部発足時の「国文学科」という名称は、現在は大学教員の側の組織を指すにすぎず、学ぶ側からいうと、学部が「国語領域専攻」であり、大学院が「国語教育専修」となっている。展示会のタイトルがやや複雑さを感じさせるのはここに起因する。以下、仮に国語専攻と略称する。

本学が教員養成を旨とする大学であるので、その一専攻である国語専攻の卒業生の多くは教職についている。これまで教員就職氷河期に何度か見舞われているので、志はあっても思うようにいかなかった例が多々あるものの、ほとんどの卒業生が卒業後も国語専攻に深い思い入れを持ってくれているようである。退官、退職された大学教員においても同様である。この企画展に際して、この卒業生をつなぐ何かを見出し、可視化して、展示を行いたいと考えている。

現在の国語領域専攻が昭和24年に国文学科として発足して以来約７０年の歳月を閲し、卒業生は２０００名に垂んとし、在職した大学教員も３０有余名を数える。それは、子規山脈に勝るとも劣らない、学びと教えの宝庫であり、卒業生と大学教員たちの流れを結集した大河である。またそれは、思いの溢れた熱き大河でもある。

展示は、主に次の内容によって構成される予定である。

○本学で退官を迎えた大学教員の手記
○大学教員の系譜
○卒業生の手記
○戦後発足した国語専攻とほぼ軌を一にしてきた京都教育大学国文学会の歩み
○卒業論文
○国語専攻関係の資料室等の写真
○「宣揚歌」の歌詞（糸岡正一先生作詞）
○「附属高校校歌」の歌詞（糸井通浩先生作詞）

この稿は、依頼者である附属図書館の長としての立場と、受諾者である国文学科最年長教員としての立場とが、偶然重なることになり、両方を踏まえて執筆されたものである。

京都教育大学　国文学科　国語教育研究室づくり
～模索の頃～

位藤（木下）紀美子

○桜並木に導かれる構

昭和４８（1973）年４月はじめ、大学の正門前で眺めた、見事な桜並木が鮮やかに蘇る。

「今日から、ここが私の職場だ。」そう思いながら、門を入った。

広々とした構内の至る所にいろいろな種類の桜が咲いていて、その中に、本部庁舎やABC棟、D棟、図書館、体育館棟がある。（講堂やF棟、G棟、情報処理センター等は、その後に建てられたもの。）中央の通りを真っ直ぐ行き、グラウンドの手前のB棟の３階に、国文学科の研究室があった。B棟の西側に、新しい教育工学センター（現在の教育創生リージョナルセンター機構）と旧い一階建ての旧陸軍兵舎（学生のサークル活動の部室）が並んでいた。

４月１１日、入学式より、学科の様々な活動が始まった。

1，学生たちの自主的研究会

（１）『索』読書会から教材研究会へ

明るい夢や希望を感じさせる出立だったが、学内の雰囲気は微妙だった。昭和２４（1949）年に、戦前の師範学校等の伝統のもと「新制国立大学」

として二十数年の歩みを重ねていたが、（60年安保→）70年安保の余波があり、学内はなんとなく落ち着かず、学生はバラバラとして元気がない。国文学科は、昭和４７年と４８年と２年続けて２人ずつ、４人の教員が交代した。（国語学の岸田武夫先生が学内選出初の学長になられ、新たに松井利彦先生が、三人は定年退官のため、小澤俊郎先生《国文学》、青木五郎先生《漢文学》と私が着任した）。それまで教員７人中、最年少だった野々村勝英先生が、「私が真ん中になりました。」とおっしゃった。在学生達もとまどったのだろう。

そうしたなかで、１回生６～７名が集まり、読書会を始めた。放課後、私の研究室で、『木かげの家の小人たち』（いぬいとみこ）を輪読するうち、多くは昭和40年代出版の文庫を使っていたが、一人が、昭和30年代出版の本（「だれもしらない小さな国」《佐藤さとる》と合本になったもの）を持っていて、二種類のテキストでは、あちこちの表現が違っていることに気づいた。そこで、強い疑問を持った一人が、夏休みに、両者の異なる表現をすべて書き出し、比較考察したことを、休み明けに発表した。昭和40年代の文庫版は、作者が、続篇『くらやみの谷の小人たち』を執筆する中で、第１作の表現（特に「青いコップ」の象徴性を高めるための描写）を変えたと推定した（作者自身は全く公表していない）見事な考察であった。

こうしたことが、仲間の探究心を強め、２回生の時には、中西先生が始められていた、附属学校との共同研究会「国語部会」（昭和26年、全国に先駆けて、本学には、大学及び附属学校の全教員が参加する「教育研究所」が設置されており、後に、「教育工学センター」と併せて「教育実践研究指導センター」になる）の活動の一部を参考に、学生達で独自に研究している。

写真1：中西昇先生（京都教育大学国文学会誌13号より）

新美南吉の「かぶと虫」（南吉のつけた題「小さな太郎の悲しみ」）を教材として、幼稚園、桃山小学４年、桃山中学1年と３年、大学３～４年で実践。幼稚園と小学は、附属の先生。中西先生が中学（附属桃山中学校の校長）と大学（「中等国語科教育」）を担当された。中学では、先に３年のクラス全員に作品感想をカード（B７版）に書いて貰い、それを模造紙に貼り、1年の生徒は、作品と中３の感想を併せて読みながら、自分の感想を書く、という学習である。学生達は、小学と中学の授業を参観し、後は、幼児から大学生（上回生）までの資料（感想）をもとに、自分たちの作品への最初の感想やその後の想いを併せて、作品の読みや発達との関わりについて考究していった。放課後午後４時半頃から６時過ぎまでの真剣で充実した時間だった。（私は、校務のない時に参加した。）

彼等は、自分たちの成果を冊子『索』や『かぶと虫』に纏め、教育工学センター（中西先生がセンター長で、頼みやすかったので）の用具を借りて、印刷・発行した。（この頃、第一次オイルショックのため、厳しい紙不足に加え、学科には故障の多い手動輪転機と古い謄写版のみで不便だった。）

この学生達の多くが国語科教育を専攻し、中西先生のご退官時（昭和52年3月）、先輩の卒業生や他の学年の専攻生の協力を得ながら、ご退官記念の手作りの冊子（国文学会誌とは別）を編集・発行して、先生にさし上げた。先生はとても驚かれながらも、喜んで涙ぐみつつ受け取られた。

（２）「山吹会」（学生たちの短歌会）

昭和４９（1974）年入学生が始めたものだ。中西先生は、時間のあるときに、学生達をよく吟行に誘われていた。散策をしながら、それぞれが句を詠み、合評会を楽しまれていた。その後で、作者名をはずした作品一覧を参加していない私にも見せてくださった。青木先生もよく参加されていたが、その青木先生の最初の担任が、昭和49年入学生である。センター長と校長との兼任のため不在がちの中西先生の研究室で、学生達が句会を開いているのをよく見かけた。会の名前は、先生がつけられたと聞く。この会のメンバーは、先生のご退官後も、また、その学生達の卒業後４０年以上も会を続けている。山吹会は、現在も、年に数回開催され、その時々の作品が冊子に纏めて出されている。会員は子ども連れで参加し、子ども達も一緒に句を詠んでいて、その場やその親子やその家族の風景まで想像できて、楽しい読物になっている。

学生時代から続けられているこの句会は、仲間の絆であるとともに、それぞれの人生の歩みを語りあうものにもなっている。

２，国語（科）教育研究室の活動

国文学科では、学生は３回生頃から、国語学、国文学、漢文学、国語科教育の専攻ごとに研究室に所属していた。国語科教育は、児童文学も併せて対象にしており、国文学科だけでなく、幼児教育科で、語学・文学に関する専攻の学生も、一緒に活動することにしていた。（幼児教育科は、専任教員２名（心理学と音楽）のため、「保育言語」《必修科目》の授業を国語科教育で担当していた。）

３回生から始める、週1回の放課後のゼミで、順番に各自が自分のテーマに関して発表し、それについて参加者や中西先生や私が意見や感想を述べ合う。夏休みには、３・４回生一緒に合宿研修を行い、卒業学年（４回生等）の全員が中間発表を行う。４回生後期になると、それぞれの進度に応じる個別指導を中心にして、論文提出まで続ける。

専攻が未定の２回生から要望があったときに

は、読書会等の形式で週1回開いたことも多い。1年間模索し、3回生になって改めて専攻を決めていた。中には、全教員の研究室を訪ねて各専門の話を聞き、論文は他の専攻に決めた上で、私のところで仲間とともに（専攻はいろいろ）作文の研究をしたいといって長期の活動をしたケースもある。滑川道夫先生編集の『少年少女つづり方・作文全集』（明治～昭和）を各自で分担して分析・考察し、定期的に検討を重ね、4回生の論文提出後に最後の仕上げを冊子にまとめて卒業していった。

夏の合宿研修に、卒業生が加わるようになり、在学生中心のゼミとは別に、卒業生中心の研究会（小学校・中学校・高校勤務）「新しいパンの会」（名付けは、中西先生の提案から、明治末期の新芸術運動になぞらえて。）が発足した。始めは、国語科教育専攻生が中心だったが、次第に、いろいろな専攻卒業生等（一部、他大学出身や附属学校の教員も）が参加するようになった。昭和５０年代半ば頃から、中学・高校の部会が独自に活動を始め、月例会を開催、「藤森国語教室～想の会～」と名付けられた。「新しいパンの会」の全体会は、年4回（5月、8月、11月、2月）。8月は合宿で、国語科教育研究室との共催。4回生等の卒業論文中間発表（後に大学院が設置されてからは、修士1，2年次が加わる）と、卒業生（現職教員）の発表や調査研究の報告、ワークショップ等を行う。

ゼミも研究会も、中西昇先生ご退官後は、小澤俊郎先生が後任として（小澤先生移籍後の国文学担当には佐藤義雄先生が着任）、小澤先生が亡くなられた後は、池垣武郎先生が、さらにそのご退官後は、植山俊宏先生が専攻担当教員として、私とともに指導にあたってくださってきた。

3，「探索・探究の場」の拡充

学生の知的好奇心を耕す場は、教室にこだわらない。国文学科の先生がたは、それぞれがいろいろな場に誘ってくださった。

中西先生は、一般教養「演劇」の担当の関わりで、歌舞伎の顔見せ（12月）に希望する学生や国文の教員を案内され、野々村先生は、狂言（能）に専攻生等を連れて行かれた。観客として舞台と一体化することで、迫力や繊細な感情が伝わってくる体験である。

小澤先生も、野外授業や地域探索や山歩きなど、開かれた外気の中で、賢治をはじめ、さまざまな近代作家や作品の話を、ご自分のことも交えながら語ってくださった。構内の芝生の上もあれば、御香宮神社へ徒歩で往復したり、大学の裏手の道から稲荷山に向かい裏手の竹林を抜けて神社に登り、表参道を下って帰って来たりした。土（午後）、日の散策の時は、学生とともに私もよくお供をさせていただいた。先生の担任のクラス十数名と、2月に北山に登り、山頂の雪景色に感動し、夕方5時に全員無事に麓（集合場所）にもどったときは、感無量だった。登り下りの途中で交わすいろいろな学生との会話が楽しかった。

大塚光信先生や松井利彦先生はそれぞれ、いつも研究室の戸を開放され、いろいろな学生達と会話を楽しまれていた。大塚先生は、お茶（コーヒー）を飲みながら、松井先生は、マドロスパイプ（？）から煙を燻らしながら、にこやかに笑いつつ、耳を傾けていらっしゃった。どの研究室にも、学生達は気軽に出入りしていたが、とりわけ青木先生や、大塚先生、松井先生の部屋は多かった。必ずしもゼミ生だけではない。特に上回生になると、学生は、専攻の教員をさけて他の教員と雑談をする傾向があった。卒業論文の制作が行き詰まったとき、すぐにゼミの教員に相談できる学生は少なく、固まった心や頭を解放し、気持を取り直す場が必要になる。その場を提供されていたのだろう。

国文の教員同士も放課後、会議以外にもよく雑談をした。そうした中で、個々の学生の情報も交換され、教員全体で共有化して、それぞれの指導等を考えることができ、ありがたい場になった。

青木先生は、いろいろな活動に積極的に参加をされ、研究室では、国文の学生や教員に加え、他学科の学生たちとの交流も大事にされていた。先生はさらに、B棟の傍らに、花畑を自ら作られた。草を刈り取り土を耕し、花の種を撒いたり苗を植えたりされるうち、一人、二人と手伝う学生もふえ、学生だけが水をやっている時もあった。手間と時間をかけて、「青木花壇」ができた。春になると、三色スミレやチューリップが花を開き、木の多い構内では、多くの目に留まりやすい存在になった。

4，国文学科の新たな基礎づくり

（1）国文学科では、入学時に担任を決めるが、その後、上回生になり学生各自が決める卒業論文専攻の教員との役割がはっきりしていず、教育実習や就職に関する対応が不明であったり、専攻を決めていない学生の動向がわからなくなったりという問題があった。そこで、入学時の担任が4年間、教育実習や就職等も含め全員を掌握すること。留年生の場合はその時の４回生担当教員が世話すること。教育実習は、3回生担任が当番表（教員7名が実習5校《小・中・高を分担して行く》）を作成し、その年の国文２・３回生の実習関係全体の世話をすること、などを決めた。このことにより、全学運営のための学科からのいろいろな委員も分担しやすくなった。

（2）○昭和４８年まで、国文学科の新入生歓迎行事（国文学会行事にもなっていた）として、4月下旬頃、万葉ハイキングというのがあった。上回生が新入生を案内し、奈良を散策し、神社等に詣でる（参拝料は、学会より）というもので、野々村先生をはじめ十数名で参加した。翌昭和４９年、学生達と奈良市内を一日散策した後、教員のみ（中西先生の発案で、ご退官された井上先生、岡阪先生をはじめ、小澤先生ご夫妻、野々村先生、青木先生、木下《位藤》）で一泊し、大台ヶ原に登ることになった。それが、学生達に漏れ、翌朝早く、小さな宿の前で青木先生と話していると、隣の村に泊まった学生達三十名余りが、トラックの荷台に乗って手を降りながらやってきた。結局、総勢四十名あまりで、バス一杯に乗り込んで大台に行った。青木先生は、途中で運動靴を購入して履き替えられたが、野々村先生は、背広にネクタイ、革靴で、後の教員や学生たちは、ハイキングの恰好であった。その後、適当に班に分かれて、2時間ほど山道を散策したが、細い道に大木が横倒しになっていたり、急斜面を登ったり、結構体力を必要とする厳しいものだった。それだけに、晴れ渡った山頂からの眺めは絶景だった。これが楽しかったのか、翌年からは、万葉旅行になった。（大学全体で、5月頃、新入生合宿研修が始まるまで、続く。）

○青木先生のクラスが、卒業旅行（３月、城之崎温泉）を始め、これも慣例となった。４年間の最後の締めくくりとして、学生達が中心に企画し、担任以外にも、複数の教員も参加し、まさに寝食を共にして、大事な思い出を作る行事になったようだ。

○学科として、２・３回生を中心に研修旅行を始めた。昭和５３年より、文部省から教員養成学部・大学に、小学校・中学校での修学旅行のための研修

研修旅行（2006年鳥羽伊勢）

旅行予算がつき、国文学科でも実施することにした。大学が、Ⅰ類の1回生（全員）対象に、7月に「水泳訓練」（天の橋立で1週間）を実施していたので、その同時期にした。それぞれの回生から委員数名を選出し、学生が中心に２泊３日の企画・運営・実施することにした。３回生は木下（私）、４回生は小澤先生が担任で、仁田義雄先生（昭和５２年に転出された松井先生の後任）が一緒に参加してくださった。行き先は、信州。宿泊所は隣り合わせの農家の離れ２軒。往復は、京都のバス。現地では、行き先の希望ごとに３班に分かれ、徒歩なり現地の交通機関を利用するなり、交渉や段取りは全て学生委員が責任を持って行う。

自然に恵まれ、２軒の農家のかたがたが競うように出して下さる食事や果物はおいしく、鄙びた昔の宿場町や郷愁をそそる玩具など、面白く楽しいが、歩く距離は半端ではない。（バス停留所から宿泊所まで約３０分、他も交通の便はよくない。）学生たちは戸惑いながらもそれぞれに楽しんでいるようで、ひとまず充実した研修旅行になるかと思ったが、帰る時に、問題が生じた。お世話になった農家に挨拶をすませ、バス停で待つも、バスは来ず。近くに家もなく、やむなく２名の委員と仁田先生と私が公衆電話のある所（宿の近く）までもどり、学生が電話をかけた。大学の事務局（教務・学生）は、水訓のため不在らしく誰も出ない。ようやく探し当てた京都のバス会社への電話で、バス停への到着時間が、午後1時でなく3時になっていることがわかった。それを聞かれた瞬間、仁田先生が、そばの学生に、「すぐもどってくるように皆に伝えろ。」と指示を出された。片道３０分かかる所を、既に1時半を廻っている。2時過ぎに皆に伝え、引き返してきたら、すぐまた折り返さなければならなくなる。その学生は行ってしまったので、私はあわてて、別の学生に、「もどらずに、そのままバス停で、3時までに着くバスを待つように伝えて」と頼んだ。結局、3時前にバスが到着し、無事に皆乗ることができたので、笑い話で終わった。予測できない事態は、学生にも私にもよい経験になった。

旅行は、日常とは異なる時空間で、いろいろな体験が出来るとともに、自他の思いがけぬ一面を発見する場や機会が多い。しかし、学生たちの自主的活動として始まり続けられていたのが、次第に、文部省や大学からの要請としてのものに変わってきていることは、気になっている。

（３）国文学科の独自な組織、「国文学会」と学会誌のありかたも課題であった。それまでの卒業時の終身会費で終わらせるのはもったいない、年会費制で活動するものにしたいということで、青木先生とともに取り組んだ。もとは、退官教員のあるときに発行したという「国文会報」を、昭和46年度、昭和47年度３人のご退官の際、「国文学会誌」に変えたと、松井先生から伺った。その2冊の刊行で、会費も費えたとのこと。（昭和５１年度の中西先生のご退官号は、６人の教員が拠出した。）そこで改めて、新制大学になってからの卒業生に葉書でアンケートをとり、学会のありかたについてご意見をいただき、学科で協議を重ね、３～４年かかったが、基本となる方針を出した。年会費をいただき、毎年、学会及び総会を開催すること。学会として、講演や研究発表、懇親会の場を設けることで、卒業生及び学生や我々の啓発と交流等に活用する。また、学会誌は、別に会誌会員制として、希望されたかたがたに実費をいただき、毎年刊行することにした。

事務局は、総務：青木先生、会計：木下が担当し、作業等は、各回生の学会委員に助けて貰った。

丁度その頃、国文学科事務担当となった奥山セツ子さん（その前の事務官浅井康子さんが退職されたため。）には、特にお願いして、日常的な事務処理を手伝って貰い、運営を軌道に乗せることができた。（その後、各学科担当事務官廃止。）

○私が着任してから昭和５０年代前半までの印象深い主なことである。その後、平成２８年3月まで勤めることになろうとは全く予想もしない頃だったが、学生たちや先生がたの一人ひとりと最も密に関わり合い、切磋琢磨しあった時代でもある。

授業は、初等教育（「教材研究」「初等教育専門」～１５０名前後と２５０名前後の受講生が半期で交代）「保育『言語』」（国語科教育特講Ⅰ）約７０名、「国語科教育特講Ⅱ」・「国語科教育演習」１０名前後で、三つの大人数の科目は、いろいろ工夫（特に紙不足は深刻な問題）が必要だった。

（令和3《２０２１》年9月7日　記）

昭和48年度～平成20年度　国文学科教員

2009年3月最終講義での位藤先生

教師としての「土台」を培ってくれた京都教育大学

谷口　茂雄

1　勉強しなかった学生時代

国文学科の入学歓迎会で、後に学長になられる岸田武夫先生がおっしゃったのですよ。

「皆さんは小学校や中学校の教師になるんだから、子どもや保護者に向き合うことを大事にしてくださいよ。このことは、学者よりも現場の先生方の方が上手なんだから。」

野々村勝英先生も、ある時におっしゃいました。

「自分のやりたいことをするために講義を欠席するんだったら、心配しませんよ。」

これらの言葉を自分の都合の良いように解釈しましてねぇ、男子寮自治会の活動とテニス中心の学生時代でしたねぇ。

勉強はしなかったんですけれど、国文学科で4回生まで残った男子は私一人だったのですよ。入学時には4人いたのですけれど、転科したり来なくなったりしましてねぇ。だから、今から思うと大事にしていただきましたねぇ。

言語学関係の単位だったと思いますが、松井利彦先生の研究室に押しかけて、

「先生、この単位は要ります。」

などと言って通していただいたこともあります。もう時効でしょうから言いますけどね。

好き勝手やっていた学生時代ですが、遅れて講義に出たこともありました。中西昇先生の演劇論です。驚きましたねぇ。１００人くらいは入れる大きな教室に学生が誰もいないのですよ。誰もいない教室で、中西先生は粛々と講義をしておられるのです。

私は、講義中は一番後ろの椅子を三つ四つつなげて寝るのが常でしたが、その時は寝られなかったですねぇ。最後まで講義をお聞きしましたよ。

卒業論文は昔話の採話と伝承傾向の分析でしたから、大学には専門の先生がおられなかったのです。それで当時の学科長であった大塚光信先生が、大学時代の同級生だからということで、京都女子大学の稲田浩二先生を紹介してくださいました。昔話研究の第一人者です。だから、卒業論文の執筆中は京都女子大学に通いましたよ。論文の内容も稲田先生にご指導いただきました。そのお蔭で、口頭試問は楽だったですねぇ。

学生の本分である勉学にいそしんだのは、卒論を書き上げてからの３か月くらいでしょうかねぇ。卒論を書いているときは昼夜逆転で、夜中に論文を書いて生協の朝定食を食って寝るという生活でしたし、硬式庭球部も引退していますから時間が空くわけです。この３か月の間に、社会科学の本も含めて100冊以上の本を読みましたよ。

本を読む習慣をつけて現場に出たことが、良かったような気がしています。

2　大学との繋がりが強くなった教員時代

学生時代には、生活綴り方研究サークル「すかんぽ」にも所属しておりました。といってもいわゆる幽霊部員でして、参加していたのはコンパの時がほとんどです。但しこのサークルに籍を置いていたことが、学級担任になった時には生きましたねぇ。

毎日「ひびき」と名付けた日記を書かせまして、一枚文集を発行しておりました。帰りの会で読み合って学級づくりにも活かし文章表現力も向上させる取組なのですが、この実践を位藤紀美子先生（当時は木下姓）が中心になって開催しておられた「新しいパンの会」で発表させていただきました。

話はそれますが、位藤紀美子先生は私が３回生の時に木下姓で着任されました。まだ独身でしたよ。私は木下ゼミの第１期生であるわけです。そんなこともあるのでしょうか、位藤先生は私の実践を日本国語教育学会の機関誌『国語教育研究』の第95集「すぐれた文集の群像」という特集号の執筆者に推薦してくださいました。

それから、本学の『国文学会誌』にも執筆の機会をいただきました。「比良の八荒のこと」という表題の、卒論にも関係する文章ですが、結婚式まぢかの夜に位藤先生の研究室に届け、丁度残っておられた小澤俊郎先生にも目を通していただきました。位藤先生にはこのことを結婚式でのスピーチで触れていただいたことを覚えています。

こんなこともありました。教職1年目の夏に校内研究会講師に来られた先生と話していて、京都女子大学の稲田先生に卒論の指導を受けたことが分かった訳です。それでいきなり副実行委員長を仰せつかりました。というのも、その当時滋賀県小学校教育研究会国語部会が『滋賀のむかし話』刊行事業に取り組んでいたのです。

その本に「滋賀県の方言について」というページがあって、私が書くことになりました。書き上げた1ページを、学生時代にご無理を申し上げた松井先生にお送りし、後出しのレポートとさせていただきました。勝手なもんですけどねぇ。

６年生を担任した時には「生い立ちの記」や「小学生の卒業論文」を書かせました。多分これらの実践も「新しいパンの会」で発表したのでしょうね、この実践を分析して卒業論文にまとめられた方もおられますよ。面映ゆいことです。

２年生担任時に「かさこじぞう」を、「全文暗唱 → 全文暗写 → オペレッタ」という大単元を組んで実践したことがあります。この実践を、日本国語教育学会全国大会の全体会で発表させていただきました。当時、文部省横にあった虎ノ門ホールです。

植山俊宏先生とお出会いしたのもこの時でした。当時の学校長が私の発表について青木幹勇先生に感想をお願いされたときのことだったと記憶しています。

それからですよ。植山先生には、滋賀県での指導、湖南市での指導、私が主宰している「国語教育を拓く会」での指導と、様々にお世話になっております。

3　京都教育大学が私の土台

土台の一番は家内と出会ったことですよ。渡辺郁子と言いまして国文学科の同期です。早くに逝ってしまったことが残念ですがねぇ。そしてやっぱり位藤紀美子先生のゼミ第１期生になったことです。社会科学の本も土台を鍛えてくれたと思いますねぇ。

さまざまな「ひと・もの・こと」との出会いを通して、学生時代よりも教職についてからの方がよく本を読み勉強したと思っています。

その土台を作ってくれたのが京都教育大学でした。心から感謝申し上げます。

在籍学科　国文学科第一類（※当時設けられていた初等教育課程）
卒業年度　昭和４８年度
初任校　滋賀県栗東町(現：栗東市)立葉山小学校　教諭
退職校　滋賀県湖南市立石部小学校　校長
その他の経歴
（１）湖南市教育研究所長（h24.4.1～h26.7.25）
（２）湖南市教育長(h26.7.26～R2.11.6)

「国文学科の思い出」

古谷　一樹

昭和５３年春４月、満開の桜の下、新入生３３名は入学式場だった体育館前で、笑顔で写真に収まった。翌年度から「共通一次試験」が始まるという前年、国立二期校としての最後の入試の年。合格発表日は年度も改まった4月1日だった。

式後の学科主催の新入生オリエンテーションで配布された冊子には「花の国文にようこそ！」とあった。Ｃ６教室での先生方の紹介、２回生のみなさんの履修説明などを神妙に聞いた。京都教育大学は1回生から上回生と一緒に専門の授業科目が受講できる。一般教育科目と第２外国語以外は、オリエンテーションで先輩方に教えていただいたとおり履修登録を行った。

1回生指定の必修科目は、大塚光信先生の「国語学概説」、佐藤義雄先生の「国文学概説」、青木五郎先生の「漢文学演習Ｉ」の３科目、そして小沢俊郎先生の「現代文学演習Ｉ」、「国文学史講義Ｉ」、仁田義雄先生の「国文法論」を選択した。高校時代に理系選択をしていたため数学・化学・物理などは得意だったが、おそらく３３名の新入生のうちで国語からは一番遠くて出来の悪い新入生であったとの自覚を当時は（今も）持っていた。だから、一般教育科目でも佐藤義雄先生の「日本文学」を選択した。教員免許取得の関係で必須であった山内観（肇）先生の「基本書法」もあった。（余談になるが、国語の教科専門科目の取得単位は、卒業時６８単位になった。II類（※当時設けられていた中等教育専攻）で小学校の免許を取らなかったため、英語の副免を取ることにし、英語の教科専門科目も２２単位取得した。英語を勉強して思ったことは「国文学科でよかった。日本語はおもしろい。国語を教えたい」ということであった。）

1回生の授業での一番の思い出は、同級生なら誰もが同じことを言うだろう。訓点がついていても読むのに苦労していた漢文を、司馬遷の『史記』を白文で、しかも『史記会注考証』の「正義・索隠・集解」を読み解きながら学ぶ「漢文学演習Ｉ」。大学生になったと実感できる授業であった。普段は温和でニコニコしておられる青木先生が、教壇から送られる鋭い視線と担当者の準備不足を厳しく指摘される口調は今でも思い出すことができる。演習の担当者になった１回生は図書館の「大漢和辞典」のあるコーナーでほぼ１週間を過ごし、仲間の協力関係も深まった。今となっては本当にありがたい授業であった。

小沢俊郎先生の「現代文学演習Ｉ」では、事前に選ばれた詩をその日の担当者がレジュメを作成し、発表して受講者と回生を越えて自由に意見交換をする純粋な演習形式で先生も同じ立場で参加し質問をされた。アクティブでスリリングな授業であった。小沢先生は宮澤賢治の研究者として著名な方で、「校本宮澤賢治全集」の編纂委員をされていた。

都立高校の教員時代、谷川俊太郎を生徒として教え「俊ちゃんは～」おっしゃったうれしそうなお顔を今も覚えている。「国文学史講義Ｉ」では、森鷗外の『舞姫』を全文朗読してくださった。学生の席の間を縫うように読み続けられる姿を「かっこいい！」と思った。

附属高校での教育実習の際、研究授業で現代詩を教材にしたのも、高校の教員を目指そうとしたのも小沢先生の授業の姿から影響を受けたからだったかもしれない。

佐藤義雄先生は、私たちの学年担任であった。

講義以外での思い出も多い。毎年全学年で行った万葉旅行や金沢・倉敷尾道への研修旅行、毎回のコンパや伊勢志摩への卒業旅行まで、いつも佐藤先生は同行してくださった。国語科教育ご担当の位藤紀美子先生もＩ類の学生には「初等国語科教育」をご担当されたが我々II類の学生は講義でお世話になる機会はなかった。（「中等国語科教育」は私たちの回生は小沢先生がご担当された。）けれども、研修旅行や国文学会など折々の機会に、お酒を酌み交わしながらさまざまなことを教えてくださった。卒業後１１年が経ったあと、私が教育委員会派遣の学生として大学院で学ばせていただくことになったとき、植山俊宏先生とともに国語科教育の研究方法について一からご指導いただいた。つたない修士論文がなんとか書けたのは先生方のおかげである。

野々村勝英先生の古典に関する科目は２回生以降で履修することとなった。古代文学から近世文学まで、お一人でご担当になり、毎回の講義では万年筆で手書きのルーズリーフ式のメモを片手に、黒板に惚れ惚れするような達筆で文字を書かれるその姿に感動した。古文苦手の私は、源氏物語や万葉集のような「大きな」文学作品を扱われた演習ではなく、中世擬古物語や与謝蕪村の演習を受講した。受講者が多くても少なくても講義の準備は万全で、ほんの1行、たった1句に1コマをかけて講義してくださる姿勢に感銘を受けた。

３回生になると、卒業論文をどの分野で書くかが話題になる。私は迷わず「国語学」研究室を選んだ。最初は「文学苦手」からの消極的選択であったが、卒業時には日本語学会にも入り、いずれは日本語の研究ができればいいなあとまで考えるようになった。大塚光信先生と仁田義雄先生のお二人の講義は２回生からすべて受講・聴講した。結果、抄物資料をもとにした「室町語研究」という、たいそうな名前の卒業論文を提出することになる。古典の読めない学生に、日本語の歴史研究はどうするべきかを一から教えてくださったのは大塚先生である。今も先生が編集された「抄物資料集成」、「続・抄物資料集成」には何枚もの付箋が貼られたまま本棚で「活躍の時」を待っている。どうも夢は夢のままで終わりそうだが、「なかなか研究が進みませんなあ」という温顔が目に浮かぶ。恩師がご存命の間に成果を報告したかった、それは一番の悔いである。仁田先生は、我々と同じ昭和５３年度に着任され、４年間国文学科にいらっしゃった。国語学専攻生は、先生を「独り占め」して、夏の府立ゼミナールハウス、冬の白浜とゼミ旅行に同行いただいた。また難解な専門書の輪読会や新しい研究の一端も解説いただいた。後年日本語学会の会長を務められた先生は優しくいつも笑顔で、ただし学問だけには厳しくご教示くださった。国語学研究室で一緒に過ごした同級生の森山卓郎氏は、仁田先生の薫陶を受けて日本語の研究者となり、後に私が大学院生の際には母校の准教授で「森山先生」と呼び「恩師」の一人となる。

高校教員となり、教育委員会人事主事の際には連合教職大学院設立にも関わり、管理職を経ての府総合教育センター勤務時には人材育成で植山先生にお世話になった。

私の１８歳から定年まで、京都教育大学にはずっとお世話になりっぱなしである。共同研究室の事務の奥山セツ子さんにもお世話になった。京都教育大学国文学科で学べて本当によかった。コロナ禍が終わったら佐藤先生をお招きして回生同窓会開催の予定である。

卒業年度　昭和５６年度
初任校　京都府立八幡高等学校　教諭（国語科）
(平成５年４月 京都教育大学大学院教育学研究科国語教育専攻入学　同7年3月同修了)
京都府立嵯峨野高等学校　教諭（京都こすもす科立ち上げ）
京都府立京都すばる高等学校　副校長（総括）
京都府立高等学校長発令　京都府総合教育センター　企画研究部長
平成２８年4月　同職退職

国文学科の思い出

向高亜由美

「京教の国文なら、文学の専門のこともしっかり勉強できる。漢文をしたいなら、青木先生が絶対鍛えてくださるから」と高校の恩師に勧められて受験を決めたのが、国文学科とのご縁の初めでした。A・B日程から国公立大学を1校ずつ受けられるようになった最初の年の混乱に乗じて、本当に運良く合格することができましたが、それよりももっと幸運だったのは、先生方や友人、諸先輩方との出会いを得たことだと思っています。

1回生の一週間は、野々村先生の国文学概説で始まり、青木先生の漢文学演習で終わりました。国文学概説の初めての講義の間中、「これが『大学の講義』なんだ！」と感動していました。F26の窓から見えた若葉の青さと共に心に焼き付いています。野々村先生のご質問にお答えできるとは思えなかったので、「あなた国文ですか」と声をかけられないように隅の方に座っていましたが、何を聞いても深い内容で、月曜の午後が楽しみでした。

漢文学演習の最初の時間、青木先生はとても厳しいというお噂とは違ってとても穏やかで、「最初の担当は先輩がしたらいい」と優しくおっしゃったように聞こえたので、不遜にも、意外に大丈夫ではないかと思ってしまいました。しかし、翌週からは縮み上がることの連続で、「その語順でそんなふうに読めますか」と叱られても、高校時代は漢文の語順のことなど考えたこともない私は、どうしてよいか全く分からずにおろおろするばかりでした。一週間は土曜日のためにあったようなもので、友人と図書館の奥に陣取り、先輩方に助けてもらいながら白文と格闘しましたが、そのおかげで友人や先輩と親しくなることができたと思っています。ただし、漢文の力はなかなか付かず、2回生の演習でも相変わらず「ぅん？」「んん！」「早く読み替えなさいよ」と叱られ続け、闇雲に読み直してみても正しい読みにたどり着けず、先輩にクスクス笑われる始末でした。

厳しいと言えば、野々村先生の国文学演習もまた格別でした。漢文学演習の担当は1週間でしたが、国文学演習は1ヶ月近く続いたように思います。幸い、どちらの担当も同回生きっての優秀な友人と組ませてもらったので、頼りきっているうちになんとか終わりましたが、調べるべきこと、考えるべきことが本当に沢山ありました。準備も授業中も大変でしたが、そのおかげで考える力が伸びたのではないでしょうか。現在、対話的で深い学びが謳われますが、何十年も前の国文学科の学びの中に、それは既にあったと思っています。

教員になって、生徒自身が活動することで読みを深めようとすればするほど、教師の確かな教材研究と入念な事前指導が必要だと痛感しますが、その度に、青木先生がどれほど学生のために時間を割いてくださっていたかということに思い至ります。担当者として研究室に伺うと、膨大な書物が積まれた山の後ろの本棚を指して、「その辺にあるはずだから、調べておきなさい」と言われることが、よくありました。当時から先生の記憶力は驚きでしたが、今、あの頃の先生の年代になって、事あるごとに「どこに置いたか」「何に書いてあったか」と大探ししている自分に気づくとき、改めて先生のすごさに驚嘆しています。

もちろん学生の書いた卒業論文もよく覚えてくださっていました。私は、江戸時代に漢文笑話で中国語を学ぼうとする流れがあったと知り、卒論のテーマにしたいと御相談に伺いました。内心、「なんだ、それは」とお感じになったと思うのですが、「そこまで考えたのならやってみたらいいじゃないか」と言ってくださいました。結局、私の考えていたことはほとんど形にはならず、困り果てていると、「白話学習のためと言いながら、漢文笑話の第1作には古典が多く引用されている」と、その出典を示唆してくださったのでした。そこに、結論めいたことを大真面目で付け足して卒業論文を完成させましたが、本当にそんなことが言えたのかどうか、怪しいものだったと思います。

今なら、せっかく青木先生の研究室にいさせていただいたのだから、かじりついてでも『史記』や『荘子』の深さを教えていただくべきだったと思います。しかし、やはり私などには太刀打ちできる気がしません。大学院では、笑話ではなくもう少し文学的なところで近世の漢文に触れてみたいという気になって、再び青木先生と野々村先生の御指導を仰ぎましたが、上田秋成の入り口を覗いたところまでとなってしまい、内心忸怩たるものがあります。ただ、教育学の修士課程でありながら、国語教育ではない研究を許してくださり、さまざまな方面から励ましてくださった諸先生方には本当に感謝しています。どっぷり国語に浸かって過ごすことのできた6年間があって、現在も国語科の教員としてなんとかやっていけているのではないかと思います。

大学院では一期生として受け入れていただき、C棟1階の部屋で4人、細々とレポートや研究に取り組んだことを覚えています。2年目は現職で院に来られた恩師とご一緒することができ、またとない経験をさせていただきました。修了後も、位藤先生の研究会に出させていただいたり、植山先生に研究会にお誘いいただいたりする中で、力のある先輩方のお話を伺う機会も得たことも幸いなことでした。

ただ、学生時代を謳歌したと言えるのは、学部時代です。4年間、損得感情抜きで濃密に関わった沢山の友人がいてくれたからこそだと思います。入学した年に植山先生が京教にいらっしゃったこともあって、(失礼な言い方になるかもしれませんが)私たちの回生は先生によく相手をしていただきました。特に下宿をしていた友人たちは、食べることのお世話にもなっていたように思います。その植山先生もご定年に近いお年になられたそうで、回生一同、感慨にふけっています。

先生方が親身になってくださるエピソードとしてもう一つ忘れられないのは、森山先生のことです。現任校の修学旅行で東京に行くにあたり、生徒にご講義を受けさせていただけないかとご無理をお願いしました。お忙しいにも関わらず二つ返事で引き受けてくださったので、生徒そっちのけで先生のご講義に聞き入ってしまいました。ゼミ生でもない上、卒業してずいぶん経つのに、忘れずにいてくださり、力を貸すよと言ってくださる安心感は、森山先生に限らず、国文のどの先生にも感じています。

植山先生や森山先生には、学会委員として国文学会のお手伝いをした時にいろいろなことを教わりました。先生方や先輩方、友人と一緒にいろいろなおしゃべりをしながら事務的なお仕事するのが、とても好きでした。最近は学会にも足が遠のいているばかりか、近況報告もしないままになってしまって、申し訳なく思っています。

一方、京都で教員をしている限りは、どの職場に転勤しても先輩か後輩がいてくださるので、いつも心強く、励みにもなっています。近い将来、同級生とも一緒に仕事をしてみたいとも思います。

卒業年度　平成2年度
(修了年度平成6年度)
初任校　京都府立西舞鶴高校
現任校　鴨沂高校

国文学科の思い出

柴田　昌平

「一類、二類、三類」

平成２年度の国文学科入学生は30名でした。募集定員から想像できていたはずですが、実際に目の当たりにすると、「こじんまりしてるなあ」と思ったものです。

入学時の内訳は、小学校教員養成課程（一類）15名、中学校教員養成課程（二類）10名（私はここに所属）、総合科学課程の日本言語文化専攻（いわゆる日言）― 時々親しみを込めて（？）「三類」と呼んでいました ― の5名です。男子学生11名・女子学生19名の構成でした。

「えっ、担任！？」

入学の日、国文学科でお世話になる9名の先生方と対面させていただく時間がありました。そのときに「この学年の担任です」とおっしゃったのが国語学の糸井通浩先生でした。まさか大学で担任の先生がいらっしゃるとは思ってもいませんでしたから、「えっ、担任!?」と、同学年の皆も驚いていました。

私たちは総じて、「悪いこと（例 誰かが単位をドンドン落とすetc.）もしないが、勉強もあまり……」という困った学年でしたが、先生には4年間ほんわかしたムードであたたかくご指導いただきました。卒業後も、いつごろからか毎年お盆のころに開くようになった学年同窓会に、ご自身の最新の論文コピーをプレゼントしてくださりつつ、つい最近までお越しくださっていました。

私個人としては、就職の際には今の勤務校へ過分の推薦状を頂戴し、また、結婚する際には媒酌人にもなっていただき、先生には長くお世話になっています。特に就職後、帰宅途中に何度かお会いする偶然があり（先生と私の帰宅方向が同じでした）、そのまま晩酌に誘っていただきました。何度か続いたころ、どこか次の偶然を期待する自分がいたことが懐かしく思い出されます。

「坪リン、植リン」

先生方との初対面の後、学年の皆で少し話題になったのが、「大学院生みたいな若い先生がいる」ということでした。その先生こそが、現在の国語領域専攻の最年長教官でいらっしゃる、国語科教育学の植山俊宏先生でした。そのころの先生はまだ専任講師で（翌年に助教授に昇任されました）、少壮気鋭の教官（ちょっとコワイ先生）という印象を受けたものです。実際には、私たちに近くて相談しやすい先生で、国文学の坪内稔典先生とともに、（特に女子学生は）「坪リン、植リン」とこっそり（堂々とだったかも）呼んでいました。

「学会委員、コンパ委員」

もう一つ「高校っぽい」と感じたのが、学科の「委員決め」があったことです。いくつかの委員がありましたが、特に「学会委員」と「コンパ委員」は今でも覚えています。

「学会委員」は「国文学会」の準備や運営のお手伝いをする委員でした。「学会」というアカデミックな響きだけに惹かれて私が立候補したのですが、そのおかげで「国文学会」に参加する習慣がつき、卒業後も度々出席させていただいています。

「コンパ委員」は誰が立候補したのか忘れてしまいましたが、「コンパって委員が催すものなん？」とびっくりしました。まあ要は、学科の飲み会の幹事ということだったわけですが、入学したての身としては必要以上に衝撃を受けたものです。

「待ち合わせは大漢和前」

授業が始まると、一回生で取ることのできた専門科目のうち、学習の大きなウエイトを占めたのが漢文学の青木五郎先生の「漢文学演習Ⅰ」でした。青木先生のご著書『史記選 春秋・戦国編―標点本』（白帝社）をテキストに、私たちの学年は「伍子胥列伝」を読みました。

高校時代の訓点付きの訓読文に馴れきっている一回生にとって、一字一字を大漢和辞典にあたりながら白文を読んでいく作業はなかなか高いハードルです。改装前の図書館1階奥の閲覧スペースに大漢和辞典が置いてありましたので、「漢文学演習Ⅰ」の前日・前々日は、「先に行っといて」「うん、じゃあ大漢和前でな」といった会話が頻繁に交わされたものです。

授業では指名された学生が白文を読んでいきますが、予習をしていってもあまり正しく読めておらず、「そんなふうに読めますか！」「担当!!（〝がしっかりと読んでやりなさい〟の意。そして、その学生担当がしどろもどろのときも……）」とお叱りを受けることも多々ありました。当時は土曜日に開講されていましたので、この授業が終わると、担当学生はもちろんのこと、一般の学生も「やっと今週も終わった〜」と開放感に浸っていました。

「万葉旅行・研修旅行」

現職に就いた後の修学旅行の予行練習として、毎年文学散歩に連れて行っていただきました。ほぼフル参加しましたが、南方熊楠や佐藤春夫らについて学びつつ、熊野の川湯温泉に宿をとった年が印象的でした。

恒例の夜の宴では、私をはじめ羽目を外しすぎる学生が出てしまう年もあって大変なこともあったはずですが、思い出されるのは、学生と相撲を取られる五郎先生のお姿など、学生ならでは、国文ならではの楽しいことばかりです。

「卒論はワープロで」

卒業論文は、位藤紀美子先生・植山先生のご指導いただき、国語教育ゼミで書かせていただきました。4月当初から何がしか調べたり、まとめたりしたものを毎週ゼミでご指導いただき、夏には位藤先生が主催しておられた研究会「新しいパンの会」との合同合宿の場で中間発表させていただいて現職の先生からもご意見を頂戴もしていましたので、後期に入ったころは着実に進んでいると感じていました。ところが、一つクリアーしてもまた次の課題が現れて……の繰り返しで、秋になっても師走の足音が聞こえてきてもゴールは見えてきません。私たちの時代の卒論は手書きで仕上げるものと、ワープロで仕上げるものが半々ぐらいの時代でした（まだPCはさほど普及していない）。私はワープロを使っていたのですが、プリントアウトしてご指導いただいてまたそれを打ち込むという時間すらなくなり、とうとう、ブラウン管がついているような大型のワープロ（ノート型ではない）を研究室に持ち込み、「位藤先生、この画面をみてください」と強引にお見せしてご指導いただいたこともありました。

最近は文学系統の学部・学科でも卒業論文を課さない大学があるようですが、このときのがんばりが今の国語教師としてのベースになっていると今でも思っております。

「京教・国文へ感謝」

平成5年度に卒業した後、20年たって思い立ち、大学院教育学研究科で再び植山先生にお世話になりました。自分が「学び直したい」と考えたときに、その場を母校に求められたことに心から感謝しております。後輩の皆さんにとっても、母校が今後もそのような場であり続けることを期待しています。ありがとうございました。

卒業年度　平成5年度
東山中学・高等学校教諭

結ばれていく　記憶のかけら

高井　奈津子

位藤先生の最終講義から１３年が経とうとしています。

位藤先生、お元気でいらっしゃいますか。

あの頃目指した「先生」となり、日々慌ただしく過ぎてゆく毎日に、このように大学時代を振り返る機会を頂き、私は一番に先生のお姿が思い出されました。時に厳しく、そしていつも温かく私たちを見守って下さり、先生はまさしく私たちの「お母さん」でした。（確か、最終講義の後にも、先生にそのようにお伝えしたような気がします。）

国語科で過ごした４年間。そこに繋がる昔の私。そこから始まる今の私。

記憶を思い起こしながら、あの頃をふり返りたいと思います。

京教国語科の思い出は、高校３年生の１２月から始まります。

＊

始まりは高３の冬、小さな狐のご縁

今でもよく覚えているのが、高校３年生の冬の日、受験のために京教のどこかの一室で集団面接を受けた時のことです。本棚に囲まれた部屋だったので、きっと国語科の研究室の1つだったのだと思います。そこには、植山先生、谷口先生、日比先生がいらっしゃいました。面接が始まって間もなく、私は「最近読んだ本を３冊教えて下さい。」と尋ねられました。しかし、受験用に用意していた「ＭＹ受け答え集」は、１冊の本しか想定していません。焦った私はとっさに「新美南吉童話集」の中から題名を思い出すことができた２作品を、あたかも２冊の本のように答えて難を逃れました。京教入学後に、谷口先生から「絵本の名前を出す人は、珍しいなと思いました。」と声をかけて頂いたのですが、その時も本当のことはお話していません。もしも、あの質問の受け答えでパニックになっていたら、私はその後の面接できっとボロボロであったに違いありません。手袋を買いに行った小さな狐は、私と国語科との縁を結んでくれた、運命の狐となりました。

＊

Ｇ棟４階　つきあたり

私の中での「国語科」は、イコールＧ棟４階でした。１回生の頃、Ｂ棟からＧ棟へと皆で引っ越し作業をし、その後はＧ棟が私たちの住み家となりました。（部屋の片づけのどさくさに紛れて、森山先生が書かれた本をちゃっかり頂き、サインまでねだった記憶があります。）４回生になると、さすがに卒論の進行具合も気にかかり、それまでよりも頻繁にゼミ室に顔を出していたような気がするのですが、一番の目的は、誰かしらがいるゼミ室に行っておしゃべりをし、安心したかったのだと思います。ちょうど夕陽の差し込む西側の窓からオレンジ色の空をなんとなく感じながら、用もなく夜まで過ごした日もありました。そこで、何か勉強らしい勉強をした記憶はないのですが（！）、Ｇ棟つきあたりの、小さな部屋は、Ｆ君がいつもパソコンに向かって作業をしていたり、Ｗ君とＹ君がふざけていたり、Ｍちゃんと Ｆ君がなぜかケンカをしていたりして（大人なのに）、そんな国語科仲間を笑いながら眺めていた私の、実は大切な思い出の場所となっていました。

＊

本と日本酒と位藤先生

忘れてはならないのが、なんといっても位藤先生のお部屋です。私は、生まれて初めて、あんなにもたくさんの本が並ぶ部屋を知りました。床から天井まで、それは衝撃的なほどの数の本があるのです。映画「となりのトトロ」で、メイちゃんとサツキちゃんのお父さんが、書斎で仕事をしているシーンがありますが、あのお父さんの書斎を１０倍濃縮したような部屋です。位藤先生のお部屋はまるで映画の世界の中に迷い込んだような、特別な空間でした。（位藤先生には、日本酒のおいしさを教えていただいたことも忘れられません。）

＊

桃太郎と私

位藤先生のお部屋に伺う一番の用事は、当時取り組んでいた卒業論文についての質問でした。昔から絵本が好きだった私は、児童文学に興味を持ち位藤先生のゼミに入りました。卒業論文は、私自身が岡山県出身ということで「じゃあ桃太郎にしよ～」と簡単に決めてしまったのですが、後々、それをとても後悔します。桃太郎については、すでに多くの研究がなされています。数々の桃太郎作品を読みながらも、位藤先生からの「あなたのテーマは何？」という質問にうまく答えられないまま、長く悩んでいたと思います。テーマがようやく決まった時に、「それでいいんじゃない。」と微笑まれた時、心の底からホッとしました。先生に教えていただき、その当時まだ大阪の万博公園内にあった「国際児童文学館」に行くことができたのも、今では良い思い出です。

＊

小さな記憶のかけらにつられるように、忘れていたはずの思い出が少しずつ鮮やかになってくると、友達の声や、先生の表情、歩いた廊下の景色、チンとなるエレベーター、ゼミ室の鍵が置かれていたロッカーの場所、トビラの閉まる音、「電気消してね」とメモの貼られた壁、色々な光景がよみがえってきました。「大学生の頃かあ。何してたっけなあ。」とぼんやり考えていた私にとって、これは、なんだか思いがけないご褒美となりました。

授業のことも、もっともっと覚えているのですが、また、伊根小学校での思い出や、ゼミ旅行、いつまでも酒宴が繰り広げられた大原の夜のこと、他にも書きたいことはあるのですが、それはまた国語科の仲間とおしゃべりすることにします。

「どうぞ、しなやかな感性と知性を磨き、幸せな未来を切り拓いていかれますよう、祈っております。」

私たちの代の卒業文集にて、そのように言葉を贈って下さった位藤先生。まだまだ人として未熟な私ですが、大学時代の温かな思い出を胸に、また一歩一歩励んでいきたいと思います。そして植山先生、このような素敵な機会をくださり深く感謝しております。この街のすべての天体望遠鏡に見つけてもらえるよう（贈って下さった歌、今も覚えています。）輝ける日を夢見て、がんばります。

京教国語科、それはとても幸せな思い出です。

卒業年度　平成２０年度
初任校　京都市立向島二の丸小学校
現任校　京都市立向島秀蓮小中学校

手記・思い出の記

小野田　磨柚

○国文学科の授業に関する印象、思い出

私は、平成28年度「国語領域専攻」の卒業生として学位を得ました。国文学科の授業は本当に多種多様の内容があり、刺激的で豊かな学びがありました。具体的には、教材研究やそれをもとにした模擬授業を行う内容はもちろんのこと、学生が自主的に取り組める授業が数多くありました。

宗雪先生のご授業では、源氏物語についてのご講義が印象に残っています。その時に必死で板書した思い出のルーズリーフを、今でも自室にて大切に保管しています。

植山先生のご授業では、俳句・短歌・小説創作を通して自分が「作者」の視点を獲得するものや、短編の小説を複数選択して分析し批評する内容まで幅広くありました。

濱田先生のご授業では、日本語教育における多様な視点を獲得しました。実際に「チューター」という、本学の学生が外国人の学生を手助けする役割も振っていただきました。

谷口先生のご授業では、「平仄」という漢詩作法を踏まえて漢詩を自身で作成するものや、実際に祇園祭の鉾を見に行って漢文を調べる内容が印象的でした。

寺田先生のご授業では、自分で設定したテーマをもとに、好きな詩を集めて独自のアンソロジーを作成する授業や、短編の小説を複数選択して分析する授業もありました。

天野先生のご授業では、「テクスト」という捉え方を前提に、文学批評の術語を用いながら、国語教材を深く多角的に分析するものが印象に残っています。また、教科書に載っている詩に絞って、修辞法などの文章表現も分析した活動も思い出深いです。

中俣先生のご授業では、「不自然なビジネスメールの文面を適切に書き直す」という課題から、社会を生きる上で必要不可欠なスキルを養った内容が印象的です。ここで培った力や視点が今も生きています。

以上のような「国語」に関する学びは、このように文に起こすとさらに豊かに思い出され、その度にここで得た経験が、社会人として生きる今も尚、自分を支えてくれているのだと再認識いたします。

○先生方に関する印象、思い出

先生方の印象は、本当に親密に接してくださいました。当時、私が受験生だった頃は『京都教育大学といえば、アットホームな雰囲気』との言葉をよく耳にしたのですが、入学してみると、まさにその言葉通りの空気感で、学科全体、大学全体で我々学生を優しく包み込んでいただきました。先生方は、学生からの他愛のない歓談から進路に関する相談、果ては人生相談に至るまで、いつも温かな態度で迎え入れてくださいました。

しかし、一方では、ひとたび国語やご専門のこととなると、年端のいかない学生だからと手加減するのでは決してなく、社会に出ていく者として対等に接してくださいました。どの先生方も、世に出る未来の教員が間違っても人前で恥をかかぬよう、温かくも厳しくご指導されるお姿が印象的でした。

○卒業論文ゼミ、及び卒業論文作成に関する思い出

卒業論文ゼミでは、天野先生の近現代文学のゼミで卒業論文を作成しました。天野先生は、絶えず学生の想いを汲み取ってくださり、快い距離間の中で寄り添うようにご指導いただいた先生のおひとりです。また、卒業論文作成の過程において、私が自分の論の方向性に迷うことがあれば、的確なご助言をいただくことができました。

他にも、個々の友人間だけでなく、広い仲間内で活発な交流ができるようにと、ご多忙の折にも、恐縮ながら近現代文学ゼミ生のために、定期的なゼミを開いていただきました。そのおかげで、親密なコミュニティに固執するのでなく、多くの学生の目でもって、自他の文章を見直し、卒業論文を書くための力を得ていきました。

思い返しても、卒業論文作成の期間は、自身の大学生活を締めくくるかけがえのない日々であり、幸福でありました。

○国語の級友、先輩、後輩に関する印象、思い出

国語の級友とは、不思議な関係を築きました。というのも、当然、他領域と比べて「国語」に関する意欲があって「国語領域専攻」を選択したわけですから、国語で扱われている教材への興味関心も高くあり、また、読書や教科専門への理解がありました。加えて、日常会話の中に言葉への関心があって、有名な文学の一節などを引用して楽しむ心がありました。私はその中で、安心してゆったりと日々を過ごすことができたのです。

先輩・後輩の関係では、相互に信頼のおける関係性を築けたのではないかと思います。過去を振り返ってみても、後輩が出来る前の私たちは先輩との交流を通じて多様な知識を得ました。なかでも、卒業論文の発表のときが印象的に残っているのですが、資料作成の工夫や発表の姿勢、発声や立ち居振る舞いまでをも学び取りました。

その背中を見て成長した私たちは、後輩とは互いに尊重し合いながら関係を形づくっていきました。とくに授業などでは、顔を合わせれば自然と一体感を抱き、和気藹々と協力してそれぞれの力を高め合うことができました。

○卒業後の京都教育大学国文学科とのかかわり、卒業後の教職人生における印象

卒業後も、折にふれて国文学科の先生方と関わらせていただきました。この手記につきましても、こうしてお声掛けいただけたことは、国文学科の卒業生として誇り高く、晴れがましい気持ちで一杯です。今も尚、国語教育を専門的に学ぶことのできる大学と、繋がり続けることができたことを大変光栄に思います。

卒業後の人生については、自身も先輩方と同様に教職の道を歩んでいます。ただ、ひとたび現場に出ると、学生時代には想像もしなかった様々な出来事にあふれていました。現在では、試行錯誤の中、自己研鑽に尽力しつつも、子どもたちとの触れ合いの中でふっと心の救われる瞬間があることを幸せに感じています。

教科の指導をしていても、生活指導をしていても、不意に心の揺らぐときに、大学生の時代を含めて、今までの人生の中で『自分には自分なりに磨いてきた言葉の力がある』というのは、一つの支えとなりました。人生という長い期間で捉えれば、もちろん非常に短い時間ではありますが、それでも「国語」について真剣に学んできた経験があるというのは、自分のなかで小さくも確かな軸となり、絶えず導いてくれました。

思い返せば、入学当初からよく耳にした『啐啄同時』という言葉も心に残っています。学生時代では、先生方が、まだ目には見えない「殻の向こう側」で、本当に様々な形で助けていただいてきたのだと思います。教育に携わる日々の中で「殻の向こう側」という視点を強く意識するようになりました。

京都教育大学で国語の分野を学ぶ者として、国文学科の先生方から叱咤激励するようにご指導たまわったことは、今も尚、思い返しても大変背筋の伸びる思いであります。また、その厳しくも温かな眼差しのなかで成長できましたことは、望外の喜びであり、自信となりました。この宝物のような自信に頼りすぎることなく、自分の足で自分の道を歩み、「熱情」を胸に抱いてゆくことで、国語の学びのために尽力したいと考えます。

この手記が、拙いながらも私にできる精一杯の謝辞となれば幸いです。

卒業年度　平成28年度
現任校　井手町立泉ヶ丘中学校

大学・学部の変遷

1876年5月～京都府師範学校
（中略）
1943年4月～京都師範学校
1949年5月～京都学芸大学 学芸学部
1966年4月～京都教育大学 教育学部
2004年4月～国立大学法人京都教育大学 教育学部

学科（専攻名）の変遷

年・月	学科・専攻		大学院
1949.5	国文学科		
1955.4	国文学科第一類（小学校教諭一級免許状） 第二類（中学校教諭一級免許状）		
1988.4		総合科学課程 言語文化コース 日本言語文化専攻	
1989.4	国文学専攻一類 専攻二類		
1992.4			大学院修士課程 教育学研究科 国語教育専修
1998.4	初等教育教員養成課程 文系教育専攻 中学校教員養成課程 国文学専攻	総合科学課程 言語・社会コース 日本言語文化専攻	
2000.4	教員養成B系 文系教育専攻 国文学専攻		
2001.4	学校教育教員養成課程 言語・社会教育系 国語科教育専攻		
2006.4	学校教育教員養成課程 国語領域専攻		

国文学科の歴代教官・教員

定＝定年退職　転＝転出　移＝学内での配置換え
没＝死亡（年月が確認できたもののみを記した）

国語学

奥村三雄（1950.4～1956.3転、1998.4没）
岸田武夫（1943.6～1971.3→1971.4～1975.4学長、1994.1没）
大塚光信（1967.4～1990.3定、2016.3没）
松井利彦（1972.4～1977.9転）
仁田義雄（1978.4～1982.3転）
糸井通浩（1982.4～1994.3転）
来田隆（1994.4～2004.3転）
森山卓郎（1990.4～2012.3転）
中俣尚己（2012.9～現在）

国文学

糸岡正一（1943.4～1960.3）
井上治夫（1943.4～1969.3移→国語科教育）
藤井和義（1943.6～1972.3定、1993.9没）
野々村勝英（1961.4～1994.3定）
小澤俊郎（1972.4～1977.3移→国語科教育）
佐藤義雄（1977.4～1985.3転）
出原隆俊（1986.4～1989.3転）
坪内稔典（1990.4～2002.3転）
宗雪修三（1994.4～2021.3定）
日比嘉高（2004.4～2009.3転）
奥野久美子（2009.10～2012.3転）
天野知幸（2012.4～現在）

漢文学

岡阪猛雄（1943.4～1973.3定、1985.10没）
相浦杲（1952.4～1958転、1992.12没）
村上哲見（1959.4～1967.3転）
青木五郎（1973.4～2000.3転）
谷口匡（2002.4～現在）

国語科教育

井上治夫（1969.4～1973.3定、1987.1没）
中西昇（1967.10～1977.3定、1994.3没）
小澤俊郎（1977.4～1982.3没）
位藤（木下）紀美子（1973.3～2009.3定→2009.10～2016.3学長）
池垣武郎（1983.4～1987.3定、2004.2没）
植山俊宏（1987.4～現在）
寺田守（2009.4～現在）

日本語教育

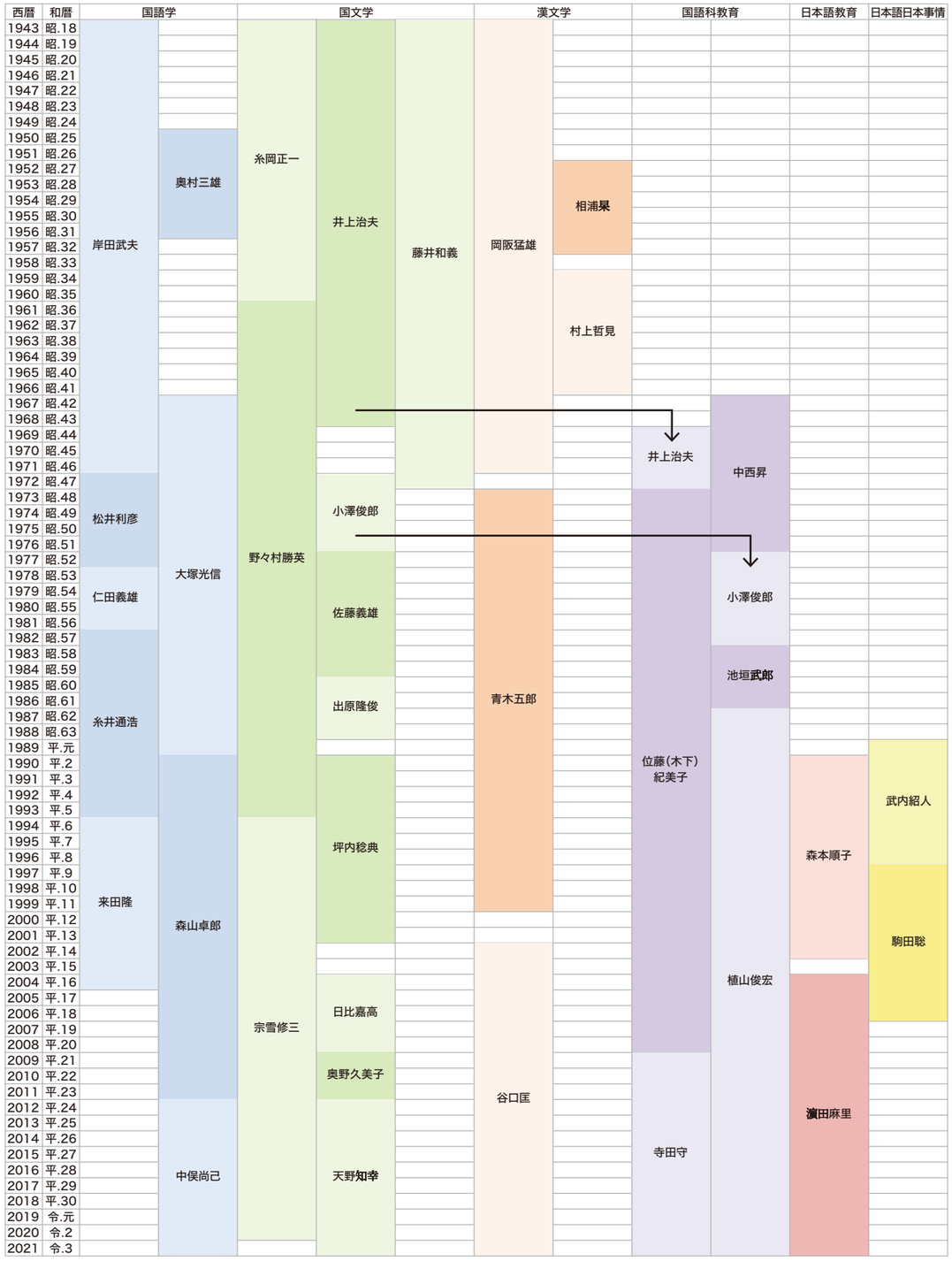
森本順子（1990.2～2003.3転）
濵田麻里（2004.3～現在）

日本語・日本事情

武内紹人（1989.10～1997.3転、2021.4没）
駒田聡（1997.4～2007.3転）

主要参考文献
・『京都教育大学開学三十年記念誌』（1980年）
・『京都教育大学百二十年史』（2001年）
・『京都教育大学国文学会誌』（旧『京都学芸大学国文学会会報』『京都学芸大学国文学会報』『京都教育大学国文学会報』）（1953年～2021年）
（大学事務局で提供を受けた情報により、上記参考文献に記載された年月等を一部修正し補った）

国文学科教員在職期間



国文学共同研究室

国語学
共同研究室

漢文学研究室

院生室

G棟4F

2016年国文学会

2019年国文学会

京都教育大学国文学会・ホームカミングデー立て看板

（左）京都府立図書館で
展示された学生に
よる教科書比較

掲示板に書かれた
栗麻呂短歌会の案内（右）

（左）研修旅行
（2017年小豆島）

研修旅行
（2018年明日香）（右）

（資料編２）

京都教育大学国文学会誌（当時は会報）１号

京都教育大学国文学会誌主要号一覧

京都教育大学国文学会誌5号

京都教育大学国文学会誌40号

京都教育大学国文学会誌
24号.25号合併号

栗麻呂短歌会歌集バックナンバー